

「京都の知恵と文化を生かした環境懇話会」

脱温暖化に向けた京都からの提案～

キーワード目次

I 世界レベルでの温暖化の課題

キーワード1: 社会文化的フレーム

- ① 「温暖化、格差問題、人口、食糧、エネルギーなど問題の多様性
- ② 「問題に対する対処のプライオリティの多様性
- ③ 「解決する方向の指向性の違い
- ④ 「価値観の違い
- ⑤ 「人間の基本的な考え方＝文化の多様性の中で世界との一体性をどのようなフレームで求めるのか

キーワード2: 戦略的（ガバナンスの）フレーム

- ① CO2 半減
- ② ポスト2012の削減目標とセクター別アプローチ

II 考え方の転換

キーワード3: 考え方の転換

- ① 価値観の転換
- ② 新たな文化的価値の創造・文化的蓄積
- ③ 質への投資・意識の共有

III 「暮らし方の提案」※政策提案

キーワード4: CO2の強力な削減

- ① 世界のリーダーとして
- ② エネルギー供給の在り方
- ③ 技術と経済の仕組みのイノベーション
- ④ オイルショックの教訓

キーワード5: 炭素に価格が付される社会

- ① CO2削減サイクルの確立
- ② 暮らしの工夫
- ③ 京都エコポイント
- ④ 「農」のすすめ（フードマイレージ）

キーワード6: 新たな暮らし方の発信

- ① 「シンボリックなもの
- ② 「ローカルイニシアティブの発揮
- ③ 「京都からの発信・DO YOU KYOTO?

「京都の知恵と文化を生かした環境懇話会」

脱温暖化に向けた京都からの提案～

キーワード

I 世界レベルでの温暖化の課題

キーワード1: 社会文化的フレーム

- ⑥ 温暖化、格差問題、人口、食糧、エネルギーなど問題の多様性
- ⑦ 問題に対する対処のプライオリティの多様性
- ⑧ 解決する方向の指向性の違い
- ⑨ 価値観の違い
- ⑩ 人間の基本的な考え方＝文化の多様性の中で世界との一体性をどのようなフレームで求めるのか

キーワード2: 戦略的（ガバナンスの）フレーム

- ① CO2 半減
- ② ポスト2012の削減目標とセクター別アプローチ

キーワード1: 社会文化的フレーム

② 温暖化、格差問題、人口、食糧、エネルギーなど問題の多様性

- ・ 南北格差問題は地球温暖化問題に結びついている。
- ・ 世界レベルでは人口が増えすぎ、伝統の継承がうまくいかない。小さな地域で生活世界がうまくいっていたとしても、60億人の世界になったときに、(伝統的な考え方が)社会システムと違いすぎてうまくいかない。
- ・ 地球温暖化問題は「食」や「水」の問題でもある。大きな人がたくさんを量を食べ過ぎる。
- ・ 低炭素社会になればすべてが解決されるわけではないが、温暖化問題は象徴的であり、近代化の意味を見直すことにつながる。
- ・ 「地球にやさしく」など言うのは傲慢である。「環境問題」という言い方こそおかしい。「環境」は所与のもので、問題を作り出しているのは人間。

③ 問題に対する対処のプライオリティの多様性

- ・ 途上国には「発展の権利」があり、これを頭から否定することはできない。
- ・ 気候安全保障 (climate security) の観点からは、途上国は深刻な状況にある。

④ 解決する方向の指向性の違い

- ・ 先進各国の違いは文化の違い。EUは社会的成熟指向、米国は経済成長指向。米国はGDP信仰から逃れられず税制度より取引制度を好む。日本は

どうか？

- ・ 「炭素に付加価値を」と言ったときに、世界において一番問題になるのは、日本・中国・インド・アフリカといった各国の文化の違いと豊かさの格差の問題。
- ・ 総量規制は普遍主義、一神教。セクター別アプローチは国ごとの実情に合わせた多神教。

⑤ 価値観の違い

- ・ 世界には東洋と西洋の二つの方法、尺度がある。
- ・ 我々は確かに豊かさを享受してきたが、アングロサクソンに同調してきただけ。土俵は一つだが尺度は二つある。
- ・ 温暖化問題の根源に東洋と西洋の思想の違いがある。

⑤ 人間の基本的な考え方＝文化の多様性の中で世界との一体性をどのようなフレームで求めるのか

- ・ アダム・スミスは経済学者の前、「道徳感情論」を書いている。公平な観察者の視点で世界を見たとき、「共生しないと地球が壊れてしまう」ことに対してどのような解があるか。もし自分が日本でなくアフリカに生まれていたらどう主張するか？
- ・ ジョン・ロールズの「無知のベール」のごとく、我々は気付いていない。共通認識の持ち方をどうするのか。
- ・ 地球環境問題の責任に関しては「共通だが差異ある責任」という考え方が用いられる。差異をコーディネーションするのが文化の役割。
- ・ 一人ひとりの立場に立って真の満足が得られる暮らし方を世界全体で進めるには？

キーワード2: 戦略的（ガバナンスの）フレーム

① CO2 半減

- ・ 途上国における排出量はこれからも増える。先進国における排出量をゼロにしないと、排出量の50%削減は実現できない。
- ・ 温暖化とは、CO2を吸収可能な大気の容量を食いつぶすことである。

② ポスト2012の削減目標とセクター別アプローチ

- ・ セクター別アプローチは、G8環境大臣会合で、トップダウンアプローチによる排出削減レベル代わるものではないと明言された。
- ・ EUや米国が中期目標をはっきりとさせてくる中で、日本政府の姿勢が見えにくい。
- ・ 京都議定書の意義と名を継承していくために、「ポスト京都」ではなく「ポスト2012」と言い方をしていく。

Ⅱ 考え方の転換

キーワード3：考え方の転換

- ① 価値観の転換
- ② 新たな文化的価値の創造・文化的蓄積
- ③ 質への投資・意識の共有

キーワード3：考え方の転換

① 価値観の転換

- ・ 今が時代の変わり目。GDP信仰からの脱却を。
- ・ 産業革命以降のアメリカ的価値観の100年のスパンで、アメリカ的社会様式を見直すという長い射程を持った議論を行い、マクロ的視点から個人的生き方まで、生活の質や豊かさの中身を上位概念とする理念と方向性を打ち出していくことが大事。（「ローマクラブ」からの報告のようなイメージで。）
- ・ 自然資本（natural capital）のストックがわかる指標も必要。
- ・ 温暖化対策としてやるべきことは、方向性や価値観を示すこと。
- ・ 「半農×半X」と言う発想で暮らしていく。
- ・ 温暖化の解決は技術開発だけではできない。人間の基本的な考え方そのものが間違っている。エネルギーや技術転換対策に寄りかかりすぎるのも危険である。
- ・ キャップ・アンド・トレードやカーボン・オフセットなど、温暖化問題をなんでもお金の取引に置き換えて解決しようとするのはよくない。もっと本質的なところから自由に議論すべき。
- ・ 温暖化問題は「山川草木の思想」で解決していくべき。
- ・ 日本はアジアで大国になったが、限界まで来ており、アングロサクソンの道ではない第三の道を探るしかない。

② 新たな文化的価値の創造・文化的蓄積

- ・ 科学者は「科学の仕事は終わった」と言った。CO2半減でようやく2～3度の上昇にとどめられる程度だという強いメッセージが発せられた。もう「DO」しかない。
- ・ このところやっと。科学的学問研究の分野でも「自然」や「宇宙」、「人間」、「生き物」の全体を捉えるようになってきたが、この間300年余りの間、限られた学問分野しか見てこず、サイエンスは行き詰まった。
- ・ 科学は宇宙や生命、人間の不思議を解明すべき。経済性に流されるべきではない。
- ・ 現在の様々な地球レベルで起こっている問題は、文化の問題。データで

は解決できない。

- 文化をどのように捉えるか。文化は個々の行為の中にあるとともに、全体を調整できるもの。
- コーディネーションの装置としての「文化」を活用しながら、日本と世界を低炭素社会に向かわせる。
- 地球温暖化問題を解決しようとするとき、「考え方」がすごく大事。この問題は「個」の問題と「全体」の問題がつながっており、解決のためにはシステム化と強制力が必要。
- アダム・スミスの「見えざる手」は道徳論を前提としていた。今や根元となる「道徳」がない。
- 文化の違いを認識しながら、中長期ビジョン時間軸上のシナリオを作っていくことが大事。
- 飽くなき長寿への欲望。「腹八分目（はらはちぶんめ）」という論しはどこにもなくなってしまった。
- 予防原則という点で、温暖化対策と健康はよく似ている。
- 負担を受け入れることで、自分で自己をコントロールすることができ、改善されていく。
- 破綻に近づいていった時、どのあたりで変わるのか。欲望と理性との戦いの転換点は何か。
- 感性や文化の役割が求められる。
- 生き方や考え方を変えていくというとき、「現在」に生きる人々だけでなく、過去に生きてきた人々の意識の積み重ねが必要。
- 50年から100年、過去は確かに少しずつ変わってきているが、急には変えられない。過去のやり方を尊重した方がいい。

③ 質への投資・意識の共有

- 長持ちさせることに価値を見出し、「質」に投資することが重要。
- これからはストックの時代、生活の量ではなく質を重視する方向でのコーディネートが必要。
- ヨーロッパの古いものや緑を大切にすまじづくりの考え方を参考に。
- 事業者と家庭の投資を促進。自分にも社会にも投資をという意識を醸成。それは「負荷」ではなく人間の本質的な豊かさにつながるものであることを示していく。
- 一人ひとりの立場に立って、真の満足が得られるような暮らし方を世界全体で進めるにはどうしたらいいか。
- これさえやれば大丈夫という絶対的な解決策はない。試行錯誤でよい。
- 人々が新たな文化価値を理解し、自主的に暮らし方を変えていくという方向にいかにもっていくか。
- 自然観や心構え、ライフスタイルなど、個々人ごとに必ずしも一体ではない。そのギャップをどう結びつけるか。
- 知恵と文化の中から人間相互の対話を進める必要があり、①他国、②将来世代、③他の生命体 という3つの対話が必要になる。
- 我慢ではなく、人生にもプラスになりますよと訴え省エネ投資によって

快適になるように促していくことが大事。

- 今の若い人たちに「同朋」（みんなのために）といった意識の持ち方が足りないというのは、教育上の問題というより、経済優先、営業利益優先という社会の仕組みに問題がある。

Ⅲ「暮らし方の提案」

キーワード4：CO2の強力な削減

- ③ 世界のリーダーとして
- ④ エネルギー供給の在り方
- ③ 技術と経済の仕組みのイノベーション
- ④ オイルショックの教訓

キーワード5：炭素に価格が付される社会

- ⑤ CO2削減サイクルの確立
- ⑥ 暮らしの工夫
- ⑦ 京都エコポイント
- ⑧ 「農」のすすめ（フードマイレージ）

キーワード6：新たな暮らし方の発信

- ④「シンボリックなもの
- ⑤「ローカルイニシアティブの発揮
- ⑥「京都からの発信・DO YOU KYOTO?

キーワード4：CO2の強力な削減

① 世界のリーダーとして

- ・ グローバルな視野が必要。
- ・ 炭素の使用枠を定め、炭素を代替するエネルギーを活用しつつ、便益と生活の質を維持していく。経済のデカップリング政策をとっていく。
- ・ 2050年までのシナリオが必要。

② エネルギー供給の在り方

- ・ 日本における90年代からのCO2排出量の増加要因は石炭。
- ・ 欧米では石炭貯留（CCS）と石炭発電所がセット。日本では活断層が多くて埋める場所がない。
- ・ 政府の原子力の位置づけは今でも確かであるが立地は限界。受け入れる自治体はどこにもない。原子力か安い石炭かをみんなに問うこと大事。
- ・ 電気代を高くして使用量を減らす一方で、再生可能エネルギー政策を積極的に進める。
- ・ 原発がいいというなら東京につくるべき。負担は同等にすべきであって、負担し合えないようなものをつくるべきではない。

③ 技術と経済の仕組みのイノベーション

- ・ ①エネルギー供給構造を変える。②エネルギー多消費型施設のあり方を見直す。③技術イノベーションを起こす。の3つが大事。
- ・ 新しい価値観を反映させた「未来産業」が必要。ブレークスルーしなければならない。

③ オイルショックの教訓

- ・ オイルショックによって省エネが進んだことを教訓とすべき。
- ・ これは「第二の産業革命」だ。
- ・ 京都はエネルギー多消費産業がなく省エネ産業がほとんど。ビジネスチャンスはある。

キーワード5：炭素に価格が付される社会

① CO2削減サイクルの確立

- ・ 石炭課税を実施すれば製品に転嫁され、人々の消費行動に影響を与えることが可能。
- ・ 環境税の使い道として、「新しい社会は環境に良くて健康にも良い。おまけに家計が浮きます」と示していくことが必要。
- ・ 環境税や排出権取引などの大きなマーケットが必要なものは国の政策として行われるべき。
- ・ 都市部では「脱自動車」に取り組むべき。
- ・ 日本には東洋的な考え方があるが、現在ではほとんど消えており、東洋的な考え方だけでは解決できない。それを生かせる経済の仕組みが必要。

② 暮らしの工夫

- ・ 住宅対策は特に重要。家を丸ごと温熱環境の対策を図って熱源がいらない家にする。バリアフリーと合わせ、健康にも良い家作りになる。
- ・ パッシブな暮らし方の提案をする。
- ・ 家庭でできることとしては、よしずを掛けて、ゴーヤなどをはわせたり、窓を二重サッシにすることが有効。
- ・ 私たちにできることをわかりやすく伝えていくことが大事。

② 京都エコポイント

- ・ エコポイントは家庭での基本排出削減枠を先行的に自治体が持ち、家庭に代わって企業に売る仕組み。環境税の代わりのようなもの。もっと大きな仕組みしていくことが大事。
- ・ 京都エコポイントは民生部門対策として良いスキーム。参加する消費者が得をするしくみ。今後は住宅リフォームなどメニューを増やし、我々の知恵を生かして、京都ならではの品のある提案を。
- ・

④ 「農」のすすめ

- ・ 「食」の問題は重要。食料自治の象徴的存在。土地の文化性が高まる。
- ・ フードマイレージの普及促進。
- ・ 土地はすべての人を支えている。食べ物を作り出し、子どもたちが遊ぶ場。人間の原点。
- ・ 「道徳教育」ではなく「自然に学ぶ」、「農業」が大事。
- ・ 子どもたちには英語を教えるより農業を。

- ・ 祇園の真ん中、小学校の空き地に田圃をつくろうという話がある。舞妓さんが田植えをして、小学生が刈り取る。おもしろいと思う。「食」の問題は重要。食料自治の象徴的存在になる。文化性が高まれば土地の価値が上がる。人々は文化的豊かさを認知すれば集まってくる。
- ・ これからは食べ物の地産地消など当たり前の社会になっていくだろう。
- ・ 「農」は人間として最低限やるべきこと。経済原理ではダメ。
- ・ 循環型社会の知恵と工夫がふんだんに込められた江戸時代の暮らしに学ぶべき。

キーワード6：新たな暮らし方の発信

① シンボリックなもの

- ・ ライフスタイルや考え方を転換させていくとき、何らかの統一のシンボルがあるとやりやすい。
- ・ 戦後50年、デモクラシーと天皇制がうまく調和してきた。それが崩れてきている。
- ・ 日本の近代国家づくりは宗教が下支えしてきた。平成にはそれがない。
- ・ オフィシャルに国民の生き方を方向付けしていくとすれば何らかの強制力が必要で、そのための根拠がいる。
- ・ 「同朋」という考え方は大事だが、「同朋」と「国」とは同じではない。愛国心とも違う。

② ローカルイニシアティブの発揮

- ・ 公害問題の対策には、多くの学者が海外から学びにきた。
- ・ 「ローカルイニシアティブ」により、国からではなく市町村等から提案され、官と民の間で目標やルールが決められ制度ができていった。
- ・ 国の役割と自治体の役割を明確にし、それぞれの地域産業にあったやりかたを進めていく。
- ・ 国の排出権取引制度の議論を見ながら、地方でやっていくことの重要性を、早い時期に強調していく必要がある。経済界の枠組みが定まらない中で、自治体としてはこういう制度をやっていますと主張していくことが大事。
- ・ 最終結論は多数決で決まってしまう。国際会議で決まってしまうことは普遍主義だ。「京都」が本気でやるなら別。
- ・ 京都自身の方向性をバックキャストिंगによって示していくことが大事。次の4つの視点から。
 - ア 京都の歴史と文化を土台にしていく。
 - イ 若い人たちと一緒に自分たちの行動を考えてもらい、楽しさや面白さと一緒に伝えていくことが必要。
 - ウ 文化的要素を含めて低炭素社会をどう作っていくのかを明らかにする。
 - エ 考え方や暮らし方の転換とともに、エネルギー消費そのものを減らすことが大事。

③ 京都からの発信・DO YOU KYOTO?

- ・ 「ローカルイニシャティブ」は大事な発想。懇話会からは「世界の京都」というスタンスで発信していくべき。
- ・ 「日本」とは何か。日本を象徴する「京都」とは何かを議論し、「京都」は今世界に向けて何を訴えられるのかという視点で議論し発信すべき。
- ・ 「もったいない」や「はらはちぶんめ」という「大和言葉」は大事で深い意味が含まれている。大胆に国際的に出していけるのは京都だけ。
- ・ 「自慢できる京都」を明らかにする京都の「見える化」が大事。
- ・ DO YOU KYOTO?の「見える化」を図る。
- ・ 源氏物語のように千年前の京都には大変洗練された文化が存在した。千年前のヨーロッパにはない文化。
- ・ アメリカ的先進性ではなく、このような京都の文化的先進性を打ち出すべき。
- ・ 江戸の文化は町民型、コンセプトやものの考え方は京都。これを発信すべき。
- ・ 京都の町家の日々の暮らしの中には、環境問題を解決していける暮らし方の意識の持ち方や工夫がある。
- ・ 1～2年で方針を出すより、ヒントを膨らませて、社会的な運動にしていきたい。